

○古跡 端村河崎の北二町五十間にあり、下荒井村蓮華寺の遺跡なりと云。三鈴の松も此地にありしと云。

○褒善 孝行者半十郎、此村の肝煎なり。享保九年（一七二四）賞して米を与う。忠義者善右エ門、寛政十年（一七九八）賞して、同上。

一五、礫宮村

1、礫宮の伝承 寛文五年書上げにも、文化六年の風土記にも、礫宮村は五軒で、一貫して独立部落の取扱いをうけ、小出・河崎が蟹川村の端村、鈴淵は二六軒でも長く真渡村の端村の取扱いを受けてきた。この意味はよくわからないが、村の発達が相当古く、恵日寺下の寺院政治があつたようであるから、その信仰の核心となつた磐梯明神に縁起伝承があり、丁重に扱われたのではないかと一応推測してみる。

うやうやしく、昔、磐梯大明神がここへ投げられたという礫を拝したが、もしや、他の地方でもよく祭神とされている隕石の類ではないかと思ったが、そうではないらしい。次に、磐梯明神に関連があるので、火山弾の類ではないかとも疑つたがそうでもない。長さ一八センチほどの、くまいしと呼ぶ黒石で、いくらか異様なひびがみえるので、不明な点もあるが、周囲の磨滅状態からは、やはり大川を流れついた円礫の類の、形の奇なるものとみられる。

近年石ブームといわれて、奇石を磨いて床や庭に飾る風があるが、これは古くからあつたことで、奇石なるがために、塚をつくり、神社として祭り、これを磐梯大明神として村人が拝んできたことは、何も珍しいことではない。

大川の氾濫が蟹川・礫・真渡の村近くまで及んでいたことは、その地形と砂礫層の分布から容易に領けるので